

韓日架橋 李秀賢4周忌追悼追慕公演

◎星畑の釜山から

—「韓日架橋 李秀賢4周忌追悼追慕公演」に招かれて—

◎李秀賢さんへの追悼詩二篇と釜山・詩六篇

鈴木比佐雄



天、地、人、あたかも星畑のようにあらゆる存在が輝いていた。満天の星空のもと、かつて外敵を見はる狼煙台のあった山頂から、私の眼下には三百七十万都市釜山の灯りが煌めいていた。「追悼追慕公演」の翌日の夜、私は私をこの場所にいざなった韓国人青年とその関係者達の深い愛を感じていた。

二十一世紀の韓日関係で最も心に残る人物は誰だろうか。そのようなことを日本人である私が問うてみた時、一人の韓国青年の名が浮かび上がってくる。新大久保駅で関根史郎さんと一緒に日本人を助けるために死亡した李秀賢（イ・スヒョン）さんだ。私は二〇〇一年一月二十六日のその事故があった後に、一篇の詩「春の天空」を習いたての韓国語と日本語の両方で書いた。いや、書いたというよりも、李秀賢さんの精神に引き寄せられて書かされたといった方が正確だった。私には、宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』の主人公で、友人を助けるために水死したカンパネラと李秀賢さんが「春の天空」で、地球の春の野草の美しさを語りあっているという幻想が湧き上がってきて心から離れなくなってしまった。宇宙から戻り銀河鉄道から降りてくるカンパネラと、これから銀河鉄道に乗り込もうとする李秀賢さんとが、出会い別れる際に高貴な魂の会話をするのを書きとめようとした。そしていつか李秀賢さんが必ず地球に戻ってくるはずだという想いでその詩を終えたのだ。

詩を愛する国である韓国でその詩「春の天空」が批評文で紹介されたことは想像を超えた驚きだった。紹介してくれたのはソウル在住の保坂祐二さん（世宗大学政治学博士）だった。保坂さんは宮沢賢治だけではなく、三浦綾子の『塩狩峠』の主人公で身を投げ出して列車を止め事故を防いだ長野

政雄に触れながら、この詩を深く受けとめてくれたのだ。その後、保坂さんはこの批評文を自分のエッセイ集に入れてくれ、その本は三版を重ねていると聞いている。

「釜山へ行かれて、彼の追悼詩を読んで下さいますか。」今年の正月明けその保坂さんからメールがあった。二月四日に、李秀賢の故郷である釜山市と彼の在籍していた高麗大学の主催する李秀賢4周年追悼式典が釜山市で開催されるという。李秀賢の高貴な魂や、詩的精神が引き寄せていると感じ、私は出席することにした。彼の命日が近づくと私の中で新しい詩の構想が湧き上がってきて、自己を超えた不思議な力で詩を促されるような精神状態になった。それは彼の祖父は日本の炭坑で働かせられ、曾祖父は日本で亡くなっていること。祖父は炭坑で働いた時の病気で帰国後も苦しみ続けたこと。実は私は彼が暮らしていた日暮里近くの南千住で生まれ、家業は石炭屋であった。彼の祖父や曾祖父が強制労働させられ掘り上げた石炭を、私の父や祖父は商いながら家族を養っていた。私と彼の家系が韓日の不幸な歴史を象徴しているようにも感じた。その不幸な関係を直視し、両国の尊敬しあう視座を獲得しようと李秀賢さんが実践していたことに心惹かれた。それらの事実が私の新しい詩「黒ダイヤを燃やす原故郷の人―東日暮里に暮らした李秀賢さんへ」の大きなモチーフになった。その詩の前半部分を引用してみる。

「夕暮れが一番星がきらめくころ／私は紙と薪で火をおこし／石炭風呂を沸かすのだった／石炭屋の息子だった私は／石炭を黒ダイヤと教えられた／黒々とした化石のような石炭を眺めていると／太古の森の世界に入っていくのだった／略」

「ここに銀色のサイクリング自転車がある／持ち主の青年が腰を浮かして漕ぎ出し／韓国海辺の町 釜山からソウルへ／一陣の風が起った／彼は韓半島をサイクリング自転車で駆けめぐった／そして日本の富士山をもマウンテンバイクで登った／強靱な足腰は韓日の大地を誰よりも踏みしめていた／彼の祖父は日本の炭坑で働き、曾祖父は日本で死んだ／私の祖父や父は東日暮里の隣の町で石炭を商っていた／彼の祖父たちが掘り出した石炭を／私の父たちは黒ダイヤといって生きる糧にしていた／彼は曾祖父の死んだ国をみたいと思った／祖父たちが働いた炭坑を探したいと願ったろう／そんな日本の地の底に降りていき／韓日の底に流れる未知の鉱脈を探ろうとした」

彼の生い立ち、生きる姿勢、その存在の在り方を想起することは、韓日の国境を越えて、韓日の根源的な「原故郷」を探ることにつながるのではないか。当日の朝、私は友人のIさんと一緒に釜山へ飛び立った。Iさんは私の詩を毛筆で書き額も製作してくれた。将来、財団の記念館が出来たらその額を納めたいとのことだった。会場に着く間に街で写真の入った横断幕を幾つか見かけた。「韓日架橋 李秀賢4周年追悼追慕公演」と韓国語で書かれてあった。公演は韓国の盧武鉉大統領や村山元総理のメッセージの代読から始まり、韓国の著名な民族舞踏家達や地元の合唱団など踊りや歌が繰りひろげられた。ついに私の番が回ってきた。壇上にあがると李秀賢さんのご両親も笑顔でのぼられてきた。私は簡単な韓国語で挨拶をし詩の額を両親に渡した。悲しみをこらえたご両親の笑顔に私は深く感動した。そして韓国の横笛を伴奏にして私は日本語で詩を読みはじめた。区切りのいいところで保坂さんが韓国語訳を朗読してくれ、無事に終えることが出来た。母親の辛潤贊(シン・ユンチャン)さんは隣に座った関係者に私の詩を聞いて「聖性を感じる」と仰ってくれたそう。その言葉を知らされて、韓日には政治や経済以外に詩的精神を共通の基盤とする「原故郷」があると確信したのだった。李秀賢さんの精神は二十一世紀の韓日の新しい扉を開き、橋を架けたのだ。そのことをこれからも忘れてはならないと韓国の友人達とともに心に刻んだ。

*この文章は西日本新聞三月十一日掲載されたものの原文で、
新聞発表されたものより多少詳しく書かれている。

お元気ですか？

私は宇宙の塵です

昔の名前はカンパネルラといいます

いらっしゃい、お会いできてうれしいです

私は電車でひかれた学生です

名前は李秀賢といいます

ちょっとお尋ねします

地球の春に行こうと思うのですが

ここで降りればいいですか？

ええ、ここで降りればいいですよ

わかりました

私が水に溺れてから 長い歳月が流れました

久しぶりに 春の野原で花を見たいのです

昔、翁草やレンギョウを見たことがあります

春の野原へ一緒に行きませんか？

いいえ 行けません

私は宇宙へ行かねばなりません

銀河鉄道の駅はもう少し上です

次回は一緒に野遊びをしましょう

お行きください

さようなら

必ず戻ってくるでしょう

さようなら

黒ダイヤを燃やす原故郷の人　　鈴木比佐雄
—東日暮里に暮らした李秀賢さんへ

夕暮れが一番星がきらめくころ
私は紙と薪で火をおこし
石炭風呂を沸かすのだった
石炭屋の息子だった私は
石炭を黒ダイヤと教えられた
黒々とした化石のような石炭を眺めていると
太古の森の世界に入っていくのだった
いつのまにか真っ暗な空には
むすうの星がきらめき
その一つを見つめていると
眼の前の石炭と同様に
朱色に燃え始めている
星とは夜空に浮かぶ石炭で
それがあんなに美しく燃えていたのだ

ここに銀色のサイクリング自転車がある
持ち主の青年が腰を浮かして漕ぎ出し
韓国の海辺の町　釜山からソウルへ
一陣の風が起こった
彼は韓半島をサイクリング自転車で駆けめぐった
そして日本の富士山をもマウンテンバイクで登った
強靱な足腰は韓日の大地を誰よりも踏みしめていた
彼の祖父は日本の炭坑で働き、曾祖父は日本で死んだ
私の祖父や父は東日暮里の隣の町で石炭を商っていた
彼の祖父たちが掘り出した石炭を
私の父たちは黒ダイヤといって生きる糧にしていた
彼は曾祖父の死んだ国をみたいと思った
祖父たちが働いた炭坑を探したいと願ったろう
そんな日本の地の底に降りていき
韓日の底に流れる未知の鉱脈を探ろうとした
東海(日本海)をこえて
日本列島を東上し
富士山を駆けのぼり

炭坑で働き病み苦しんだ祖父の魂を悼んだ
強制労働させられたアジアの民衆を悼んだ
その時 東から昇る日輪の輝きが彼に何かを促した
それから東方の日の暮れる里(東日暮里)に辿り着いた
東京の下町 夕焼けの美しい町だ
あまたの民衆の眠る墓地のある寺町だ
彼は在日朝鮮人たちが日本人と仲良く暮らす町
新しい窪地(新大久保)という町も好きになった

彼は「韓日の架け橋になりたい」と誓った
「勝利に驕らず／敗者に寛容／確固たる自分を持ち／
後悔しない生き方を宣言できるような／
子どもに育て欲しい」
そんな父母の言葉を彼は想起していた

一台の銀色の自転車がダイヤモンドに変わる
その自転車にまたがった青年は東京の町を走った
鉄路に落ちた迷える酔っ払いを助けるために
日本人カメラマン関根史郎さんと一緒に命を燃焼させた
そしていまもアジアの夜空にきらめく銀河のように
私たちの頭上で黒ダイヤを燃やしている
李秀賢、関根史郎 あなたたちは
国境を越えた原故郷の人になって
私たちの魂の底を照らし続けるのだ

2005・1・26 4周忌の命日に

釜山・詩六篇 鈴木比佐雄
—李秀賢さんを愛する人たちへ—

釜山学生教育文化会館の蛇笛

ぼくの笛の音が止んだら
朗読してくださいね
恰幅のいい奏者は
大きな横笛を豪快に吹き始め
蛇笛ともいいます と笑顔で語った

青年の魂を呼ぶためには
太い蛇のような横笛が必要なのだ
笛の音はこの世にとどまりたいと願った
青年の生きた軌跡を追っていく

あらゆる人々の悲しみを背負い
山河を巡礼する修行僧は
いつしか大蛇となってしまった
ある時、村の娘が山道を歩いてきた

木陰から毒蛇が襲いかかろうとした
とっさに大蛇は毒蛇に向かっていった
大蛇は毒蛇と壮絶な戦いをした
噛みつかれた大蛇は毒がまわり死んでいった
逃げ帰った娘は許婚の青年に有り様を伝えた
大蛇の死骸を見つけた村の青年は
涙を流して手厚く葬った
ある日、蛇の墓を訪れてみると
そこに大きな横笛があった
青年はその蛇笛を吹いてみると
修行僧の悲しみが胸に響きわたった
青年はその笛を手に取り
修行僧のように山河をさすらっていった

蛇笛の音に導かれて
私は詩を読み始めた
息が切れると助け船のように
笛の音が鳴り響いた
恰幅のいい奏者の腹から
絞り出された音が
大講堂を包み込み
二〇〇五年二月四日
釜山学生教育文化会館で
一人の青年を愛する人たちへ
一篇の詩を朗読した

東川で詩人を探す

二月の朝 クラウンホテルを抜け出し
釜山・東川の脇道を歩く
カモメたちが堤防の上を一行に並んでいる
くちばしが薄黄色 足が赤茶、白い胸
からだはグレーと黒のお洒落なデザイン
私が近づくと川の上にふわりと飛びたち
しばらく旋回して堤防の上に舞い戻ってくる

橋のたもとには夫婦が魚の干物を売っていた
橋上では魚や野菜、蕾の鉢植えが売られている
つつじ、沈丁花、木蓮
それらの花々が咲き乱れる
韓国の春の美しさを思い描いた
春の野遊びをする
韓国の人びとの笑顔を思い描いた

東川の脇には城西小学校がある
今日は日曜日だから
子供たちのように
アジョシたちがサッカーに興じていた
花壇にはどんな草木があるか
ムグンファ(つつじ)、トンベク(椿)、チョンニョ(棕櫚)、
サチオル(まさき)ソンニユ(石榴)、
フェーヤンモク(チョウセンヒメツゲ)、タンブン(紅葉)、
テチュ(なつめ)、モンニョン(木蓮)、トウン(藤)
二月の光に蕾をふくらませている
花壇の中央に世宗大王の銅像があった
台座に刻まれた忠孝というハングルが眩しかった
子供たちはハングルの創った王の前で
どんな言葉遊びをしているのだろうか

城西小学校を後にして
街角の小さな書店に入った
夫婦がキムチ鍋のような朝食を食べていた

愛読している黄大権『野草手紙』は見つからなかった
店を出るとき奥さんが声をかけてくれたが
私の語学力では聞き取れなかった
大きなスーパーに入ると書店売り場があった
すぐに韓国語の『野草手紙』を発見した
シンギョンリムの『詩人を探す』を
手に取ると十四版を重ねていた
この二冊を宝物のように抱えて
韓国人のような顔をしてレジに並んだ
私はあの青年の生まれた街で
詩人の魂を探していた

子城台の椿

赤松・黒松が青の天上をつらぬき
樹上をカササギが舞っていた
上陸して半日
この城も釜山も攻め滅ぼされました
と語った女性ガイドの李さんは
悲しく笑った

二月の子城台の椿は
蕾のまま枯れ
敗れ去った兵士の
涙のように落花していった
耳や鼻を削がれた死者を悼むために
椿の花が
植えられたのだろうか

石のくぼみに注がれた水
何のために汲まれているのだろうか
雀のためか 死んだ兵士たちのためか
鶉が遠くでかまびすしかった

城跡には
日本軍と戦った明国の千萬里の名が刻まれ
二〇〇五年二月の風の音が
むすうの無名兵士や民衆の
泣き声や歌声のようにも
おしゃべりや笑い声のようにも聞こえる

二月の光と風に
子城台の赤松・黒松が揺れ
キリシタンであった小西行長は
一五九二年 犬猫まで皆殺しにしました
と李さんのゆったりした声が響きわたり

四〇〇年の風が
私の耳と鼻を身震いさせる
秀吉はなぜ京都に耳塚を作ったのだろうか

関ヶ原の戦いで敗れた小西行長の首が
椿の蕾のように落ちて
一六〇〇年 京六条河原に晒された

一九〇五年 この国は外交権を剥奪された
一〇〇年後の青空を見上げると
カササギの翼の白が
松に降りしきる雲のように
キラリと光った

釜山市立公園墓地の鵲

アジュモニから一万ウォンで
二束の白菊の花を買って
ガイドの河さんと一緒に
青年の墓を探しまわる
場所を聞くために事務所へ行くと
そこで人を焼く熱を感じた
国は違っても斎場のいたたまれぬ
悲しみの光景は同じだ

白と黒が混ざった鴉のような鳥がいる
と日本から同行したさんが驚いている
その鳥に近づいて行く
私は懐かしい人に巡り会ったように呟いた

ああ あれは鵲ですよ
在日朝鮮の詩人たちが
憧れをもって書き記している
幸せを呼ぶ鳥だと思いますよ

鵲のいた近くに
青年の墓は見つかった
幸せを呼ぶ鳥と一緒に
青年の魂は眠っているか
白菊の花を添えて
青年の冥福を祈った

公園墓地にあるという日本人慰霊碑
この国の侵略に加担した人々を
この国の人々は手厚く葬ってくれている
日本人慰霊碑にもきつと鵲は訪れているだろう
また今度来るときには必ず訪ねよう
そう誓いながら
釜山市立公園墓地を後にした

金井山梵魚寺の木蓮

春を待つ木蓮が蕾をふくらませていた
夕暮れの梵魚寺には人はまばらだった
韓国の若者が一人で物思いに耽りながら
沈黙の石畳を歩いて行った

金井山の中腹の岩には
金色の湧き水があったという
五色の雲に乗って
梵天から金色の魚が降りてきて
楽しそうに水遊びをしていた
義湘大師はこの不思議な光景を見て
六七八年に寺を造った
寺の名を梵魚寺とした
宇宙からやって来る魚こそ
この港町の守り神にふさわしい
と考えたのだろう

すれ違った若者の心には
どんな聖なる魚が住みついただろうか
一五九二年 この寺は
秀吉軍によって紅蓮の炎に包まれた
八三〇年に建てられた三層石塔だけは
燃えることはなかった
一六一三年 この寺は再建された
丹青の鮮やかで深みのある色彩が
建物に永遠の命を吹き込んでいる

三層石塔近くの大雄殿に安置されている
釈迦牟尼仏、弥勒菩薩、迦羅菩薩は
壁面中の仏絵に囲まれていて
新羅の末裔の仏師たちが
この世に極楽を造ろうとした

いま夕暮れの梵魚寺は黄金色に染まり
木蓮は蕾をひとまわりふくらませている

また一人の若者が
この寺の山門をくぐっていった

狼煙台の星畑

最後に秘密の場所があるんですよ
ガイドの河さんと李さんがにやりと笑った
深夜の山道を車は上っていった
韓国の妖怪でも見せてくれるのか

山頂は昔の狼煙台
天上は星祭で賑わっている
山頂から見ると
釜山は星畑のように大地から発光している

三百七十万都市の灯りが
ひとつひとつ瞬き
天 地 人
この釜山で生きる
ひとりひとりの命が光り輝いている

河さんと李さんはどうしても
私たちをここに連れて来なかった
二月の澄んだ寒さの中で
街の灯りは輝きを増していた

かつて青年兵士たちがこの場所で
東海(日本海)からやってくる
敵の船を見はっていた
彼らの孤独な瞳は
私の遠い先祖であったかも知れない

見てはいけない場所
かつて見たことのある場所
いまこの場所で多くの若者が
街の灯りの美しさに歓声をあげている
私をこの場所にいざなった青年の愛が
彼らの歓声から伝わってくる

海風がこの山頂で渦巻き
銀色のサイクリング自転車に乗った青年は
かつて眼下の星畑へ降りていき
東海を渡り日本へと
ペダルを漕いで行ったのだ